



TITLE:

学会抄録 第189回京都府皮膚科泌尿器科集談会

AUTHOR(S):

CITATION:

学会抄録 第189回京都府皮膚科泌尿器科集談会. 泌尿器科紀要 1958, 4(2): 111-113

ISSUE DATE:

1958-02

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/111565>

RIGHT:

学 会 抄 録

第189回京都皮膚科泌尿器科集談会

昭和32年6月3日 於 京 都 府 医 師 会 館

(泌尿器科の部)

1 馬蹄鉄腎の1例 後藤薫・片村永樹(京大)

20才の女、腰痛を主訴として来院したが、精査の結果馬蹄鉄腎に由来することが判明したので、我々の方法を以て峡部切断術を行つたが、その方法を詳細に報告した。馬蹄鉄腎は、諸家の報告では、泌尿器疾患300~500人に1例位の割合で存在し、古来、幾多の手術方法等について報告があるが、我々は、手術適応について検討、同時に報告した。詳細は、原著として泌尿器科紀要最近号に発表する。

追加 田代勉三(開業)

昭和3年頃京都大学にて結石を伴える馬蹄鉄腎の手術例を追加し、同時に其後本患者が左上腿内側に Senkungsabscess 様の腫瘍を生ずる事、これが何であるかは猶不明であることを述べた。

2 泌尿器科領域の出血に対するAC-17使用経験
仁平寛巳(京大)

泌尿紀要3巻8号参照。

3 腎鑄型結石、特に両側例の治療 小田完五・
広井 潤(京府大)

両腎鑄型結石に両腎の保存的手術を行い成功した症例を報告する。44才、♂。初診昭和32年1月12日。7~8年前体動後血尿、腎疝痛、結石排泄をみたが、その後症状消失したため放置、本年1月初め再び体動後右側腰痛を覚え来院。全身状態異常なく、両腎部に軽

度の圧痛あり右腎下極をよく触れる。膀胱鏡検査に著変なく、青排泄は両側共に7分前後で初発し9分にて濃青となる。PSP及び水試験は略々正常。尿は軽度濁濁、顕微鏡的に血膿尿、無菌、蛋白弱陽性。レ線学的に典型的両側腎鑄型結石であつた。腰麻の下に先づ右腎凸面に3cmの切開を加え腎切石を行い血管の結紮、切開創に平行に深く、直角に浅くふとんと縫合をなし、ドレン挿入創を閉鎖した。輸血抗生物質の使用により術後11日尿は清澄となり治癒。全身状態と右腎機能の恢復をまつて、第1回術後88日目に前回と同一方法により左腎切石術を施行。術後6日目尿は清澄となり全治。術後両腎機能は術前より良好となつた。結石は左右共典型的鑄型結石と多数の小結石とよりなり重量は右側14g、左側25gで何れも主成分は尿酸塩であつた。

追加 片村永樹(京大)

56才、♂。15年前両側珊瑚樹様腎結石にて、両腎切石術を行い腎の保存的手術を行つたが、15年後両側に再び珊瑚樹様腎結石を来とし、機能良好な右腎は切石術を行い、左腎は機能殆ど廃絶し萎縮腎様となつているため腎切除術を行つた。

4 尿管痙攣症 後藤薫・日野豪・山崎巖(京大)

泌尿紀要3巻9号「複合ブスコパンの泌尿器科的応用」の報告中、第1例及び第1~5図参照。

第190回京都皮膚科泌尿器科集談会

昭和32年7月6日 於 京 都 府 医 師 会 館

1 性的神経症に対するウインタミン使用経験
後藤薫・酒徳治三郎(京大)

泌尿紀要3巻8号参照。

2 原発性男子尿道癌の1例 前田 明・沖田和
男(京府大)

50才♂、初診昭和32年4月2日、4、5年前より尿

線の狭小を感じ、時に排尿後少量の尿が漏れることがあつた。昨年春頃会陰部に拇指大の硬結を触れ某院に入院ブジー切開等の医療を受けたが最近再び尿線の狭小、該硬結の増大を訴え来院。現症：全身状態は良好にて特に異常はない。会陰部から陰囊部にわたり尿道に沿つて表面凹凸な手拳大、骨様硬の腫瘍を触れ、皮

膚とは癒着せず、圧痛はないが、勃起不能。糸状ブザーは尿道振子部迄は挿入し得られるがそれ以上は不可能にしてレ線単純撮影及び尿道撮影によると尿道球部に半米粒大の石灰化巣が播種状に認められ、球部以遠には造影剤の浸透は認められない。陰茎根部の腫瘤の試験切片を組織学的にみると扁平上皮癌像を呈す。目下 Co⁶⁰ 照射により腫瘍の縮少をみつつある。

質問 酒徳治三郎 (京大)

レ線単純撮影にて見られた石灰沈着は組織学的に見られましたか。

答 小田完五 (府大)

該部分の組織にはなかつた。

3 膀胱異物 2 例 新谷浩・山崎巖 (京大)

第1例：59才，♂。1年半前直腸癌の根治手術をうけ、術後5ヶ月して肛門部の尿道瘻及び膀胱症状を来した。膀胱鏡的に左側壁に小鶏卵大の結石があり、その一部はガーゼの織目様を示した。Young氏異物鉗子にて摘出。手術時に置き忘れたガーゼを核とせる異物結石なることを確認。第2例：32年4月手淫の目的で Wachs を尿道内に挿入せる所、誤つて膀胱内に落下せるもので、膀胱鏡的に芯と思われる糸のはみ出た Wachs 片とその破片2ヶを認めた。Young氏異物鉗子にて摘出。

なお大正4年より昭和32年6月末迄、42年6ヶ月間

の京大泌尿器科教室に於ける膀胱及尿道異物61例につき統計的観察を行った。

4 睪丸回転症 症例 大橋一郎・柳田伍平 (京府大伏見分院)

20才，男，農業。初診昭和32年2月12日，主訴は左側睪丸の疼痛及び腫脹。1週間前伐採中突然左側睪丸及び左下腹部に激痛を来し帰宅後臥床していたが睪丸の腫脹及び疼痛が遂時増大して来た。現症：左側陰嚢は手拳大より稍々小さく発赤腫脹し，正副睪丸は全体として驚卵大に腫脹。両者の境界は不鮮明で圧痛が強い。精管は殆ど正常である。睪丸回転症と診断し除睪術を行った。手術時の所見によると精系は睪丸の近くでうつ血を来し睪丸は軽度前方に30°回転し，Hunter氏導帯を欠除，副睪丸は頭部尾部の区別が不明な畸型を呈し睪丸の上方部のみ附着組織学的に睪丸全体が壊死と出血の像を認めた。

追加 片村永樹 (京大)

18才，学生。就眠中突然左陰嚢に疼痛を来した。発作後36時間で手術したが，すでに高度の壊死を来していた。なお茎部は360°の廻転を示していた。組織学的には，間質の浮腫，出血が高度であつた。

5 虫垂炎に起因した水腎症の1例 杉山喜一 (京大)

京都医学会雑誌8巻2号参照。

第191回京都皮膚科泌尿器科集談会

昭和32年9月21日 於 京大皮、泌科講堂

1 絹糸を核とした膀胱結石の数例 高石喜次 (京府大)

35才女 (経膈卵管結紮術後1年10ヶ月)，51才女 (子宮摘出術後2年)，54才男 (恥骨後前立腺摘出術後10ヶ月)，66才男 (恥骨後前立腺摘出術後7ヶ月)に見られた絹糸を核とせる膀胱結石の4例を報告し，併せて性別，縫合糸の種類，除去法等につき統計的観察を行った。

2 異型囊胞腎の1例 日野 豪 (京大)

左側に水腎を合併した囊胞腎の1例について報告した。即ち病変の程度は左側が右側に比しいちじるしく高度であり，腎門部附近に発達した囊胞のために腎が廻転し，尿管が圧迫されて水腎を発生したものである。左腎は剔出し，右腎には囊胞穿刺を行った。

3 Balanitis xerotica obliterans 外松茂太郎・楠瀬信二 (京府大)

61才男，初診32年4月15日。15才時包皮亀頭先端に擦過傷を受け，ヨードチンキ塗布で亀頭包皮炎症を発症。これに続く包皮縁の肥厚，狭窄で18才時に環状切除を受け正常排尿を得たが，切除後に亀頭，包皮の癒着および萎縮，外尿道口の狭小，ついに尿閉を来した。陰茎は環状溝の完全な消失，包皮，亀頭特に亀頭は紙様菲薄，平滑で光沢を呈し，外尿道口はゾンデを通ずる程度で，これを中心として径1.5cmの淡青白斑を認め，他は淡青褐色。組織学的に表皮萎縮，表皮突起の消失，基底層の軽度 liquefaction, degeneration, 真皮特に上層の Homogenization, 弾力線維の著明な減少を認めた。なお Kraurosis glandis et praeputii とは同症と考察した。

追加 片岡八東（京府大）

Krausosis vulvae と Krausosis glandis et praeputii はおそらく同症としているようである。

4 神経芽細胞腫の1例 後藤薫・酒徳治三郎・片村永樹（京大）

3才の♂、57年1月頃より四肢痛、神経痛様腰痛を伴って高熱を来たし、加療中、3月頃、腹部に腫瘤を触れ、京大泌尿器科を訪れた。尿には、ほとんど変化なく、右腎に水腎を認め、左腎が左へ圧迫されている。腹部中央に小児頭大腫瘤あり 神経芽細胞腫の疑いで、手術を行い腫瘍摘出を行つたが、術後24日で死亡した。剖検により、頭蓋骨、脳膜をふくめ、全身的な転移を認めた。これらについて、臨床症状、手術所見、剖検所見及び組織標本を多数供覧して報告した。

尚詳細は、原著として泌尿器科紀要に発表する。

5 前立腺癌の皮膚転移剖検例 前田明（京府大）・菅 邦彦（京府大病理）

症例：64才、男、会社員。

家族歴：父方の祖母と母とが従姉妹関係。癌、結核の系累を見ず。

既往歴：34才の時パラチフス罹患、3年前より高血圧あり、2年前眼底出血を来した。現病歴並経過：昭和31年1月頃より眩暈、倦怠感増強し同年9月15日本院内科に入院。著明のるい瘦、高度の貧血（R.147万；Hb 37%；W.3800）の原因に前立腺癌が疑われたので、

同月25日皮泌科へ紹介された。前立腺は触診上略正常で泌尿器科的自覚症状を欠き、レ線による胃腸検査等にも異常なく、10月12日右Ⅻ肋骨試験切除による組織学的検査の結果、骨内性異常骨質増殖を認め Alber-Schönberg 氏病の診断が確定的とされた。その後貧血に対する治療が行われ血液像は著明な回復を見た。翌32年6月7日背部、前胸部に大豆大及びそれ以下の十数個の淡紅色の結節に就て再び照会を受けた。その後容態悪化6月27日死亡した。

局所所見：背部には略中央、右肩甲部、左腰部に夫々1個大豆大、前胸部には両鎖骨部及右前胸部に豌豆大それ以下のもの10数個の淡紅色の結節を見、表面平滑、皮膚と癒着し、扁平に少し隆起し触れると硬く皮下組織とは癒着せず自覚症状はない。組織学的検査の結果限局性に腺癌を思はせる所見があつたが原発巣は不明であつた。

剖検所見：前立腺に腺癌像を見、心臓心尖部、左腎被膜、左右両副腎、脾臓被膜下その他各部リンパ節に転移巣を見、骨組織にも癌転移を見た。

潜在性前立腺癌の皮膚転移を来した例に就て意見を述べた。

6 巨大孤立性腎囊腫の2例 酒徳治三郎・山崎 肇（京大）

45才男子、および31才女子の2例を報告し、そのレ線所見、剔出標本に検討を加えた。